未来へつなげる環境活動支援事業評価委員会　議事録

日時：令和５年３月 24 日（金）　10：00～12：00
場所：アクロス福岡 607 会議室
出席者：評価委員　４名【久留副会長、福岡委員、村上委員、依田委員】
　　申請団体　５団体
　　事務局　　５名

＜各団体による活動報告＞
（発表 10 分、質疑応答７分）

１　愛宕の森と緑を守る会

発言者	発言内容
委員	いろいろな活動をされていて素晴らしいと思う。活動の中で教室やシンポジウムを開催されているが、広報や宣伝はどのようにされているのか。また、参加された方の中に一般の市民の方はどのくらい含まれているのか。
団体	関係各所での置きビラや福岡樹木医会の造園関係の方へメーリングリストによる広報を行った。参加者には一部団体の会員もいるが、ほとんどが一般の市民。特に樹木医の参加が多かった。
委員	折れてしまったヤマザクラの保全など、活動の中で蓄積された専門的な知識をどういった形で情報共有しているのか。
団体	専門家の助言団を立ち上げており、作業のほかに、情報共有も行っている。また、樹木医会との情報共有を行っている。
委員	活発な活動で素晴らしいと思う。サクラだけでなく、甲虫類の保全をされているとのことだが、特徴的な甲虫は確認できたか。クビアカカミキリなどはどうか。
団体	サギ類の営巣があるため、センチコガネが確認できた。クビアカカミキリは確認されていない。昔はよく見かけた大クワガタは確認できなかった。
委員	九州大学の保全ゾーンでも同じような状況にある。
委員	シンポジウムの 64 名の参加など、関心の高まりは活動を継続してきた成果だと思う。その他の活動なども多くやられているので、市民の目が愛宕山に向いて、活動の拡がりにつながればと思う。カズラ編み教室とはどういったものか。
団体	11 月から 2 月頃採取したくずの枝を使用し、花かごなどの編み方を学んでいる。会員の中の詳しい者が、講師をつとめている。

２　博多湾わかめプロジェクト

発言者	発言内容
委員	参加者を増やす広報について、今後の方策はあるか。
団体	ホームページでの周知のほか、これまでの参加者などへ口コミで拡げてもらった。また、地域の一部の公民館に案内を行ったほか、これまで付近の高校の参加もあったので、そういった場所にも広報を行いたいと考えている。
委員	ホームページや SNS による広報は飽和状態にあり、有効な手段として機能しなくなってきていると考えている。クラシックな口コミなどに効果があるように感じているが、小学校等への広報などはどうか。
団体	公民館から近くの小学校につなげ、環境学習という方面で取り組めないか検討いただいている。また、参加者からのアンケート結果を分析すると、広報手段としてはメーリングリストが効果的だと分かった。
委員	環境負荷の低減という意味ではどのような効果があるか。
団体	わかめは、1 年で成長するので、ブルーカーボンの役割としては大きくない。炭素や窒素、リンの一定の低減効果はあるがわずかである。どちらかと言えば、直接的な環境負荷の低減ではなく、身近な海にわかめを育てる環境があることに気づき、その環境を維持したいという気付きを得る環境教育の効果が大きいと考えている。
委員	福岡市の助成を受けている点を考えると、わかめの生育と博多湾の環境のつながりについて、市民にもっとアピールしても良いのではないかと思うがいかがか。またこれまでの活動から経年比較して、環境の変化によりわかめの生育に変化があった点はあるか。
団体	参加者の、「海や川の栄養を受けて育つわかめを採って食べる」という行為自体が、陸を含めた物質循環や、自分たちが博多湾を含めた地域環境の一部であると感じることにつながると考えている。またわかめの生育は、畑の農作物と異なり、人為的なコントロールが及ばないため、環境そのものをダイレクトに知るきっかけになる。団体で作成した博多湾の冊子にはその理念も盛り込んでいる。経年比較でわかめの生育に大きな変化はないが、博多湾で採れたわかめを食べることで博多湾の自然環境に目を向けるきっかけにつなげていきたい。

3　水と緑の楽校

発言者	発言内容
委員	活動頻度が高く、身近な自然である川の中に環境学習の場を作り出し、利用している点がすばらしいと思う。今後はどのように活動を拡げていく予定か。
団体	日常的な関わりを重視している。活動のハードルを下げていくことで、地域の方の活用が進んだり、別の人たちが別の場所で活動を取り組むことにつながってほしい。環境学習で伺った公民館では、活動についてのお話もしており、その後草刈をはじめたところもある。
委員	大変活発な活動で驚いている。活動を行っていくうえで、参加者が固定化していく点は課題だと思うが、今後の活動の方向性としては参加者が固定されつつ進めていくスタンスなのか。
団体	メンバーは固定化してしまうが、継続していくためには仕方のない部分でもある。無理のない範囲で定例の活動以外のイベントを開催しているが、その場が多様な人と出会うきっかけになり、そこから活動への参加者につながることもある。地道にやっていく。
委員	川の近くに住んでいる市民にとって、川の除草は悩ましい問題だと思うが、そういった方たちが活動をマネしたい、活動のやり方を相談したいという時にはどのような手法があるか。
団体	毎月第 4 土曜日に活動しているので、相談があった際は、まずは一緒に活動に参加することを勧めている。公民館で学習を行う際は自分たちの活動についてノウハウの共有を行っている。
委員	環境教育の空間づくりを大切にされている点がすばらしいと思う。地域に根差して継続してこられた活動が市全体に拡がってほしいと考えている。今後のさらなる展開はどのように考えているか。
団体	活動の情報は、積極的に発信するよう努めている。例えば全国にいる「水辺の小さな自然再生」の仲間たちと情報発信や交換を行っている。また自分の活動も、北海道で行われている活動などにインスパイアされている面が多分にある。今後も自分が得た情報を地域に還元したり、地域に共有するよう努めていきたい。そのほか、川を使用している人の数や草の成長との関係などを調査しているので、そういった活動の効果についても共有していきたい。

４　室見川再生を語る会

発言者	発言内容
委員	金武小学校のこどもたちと密に活動されている点が良いと思う。環境への負荷低減効果として挙げられるものはあるか。
団体	ダイレクトに負荷低減につなげるのではなく、まずは生きものや環境への興味を高めることが大切と考えている。そのためにも正規の授業である総合学習の中で自分たちの活動を行っていく意義がある。長い目で見て、環境負荷が低減すると考えている。
委員	事業は、補助金で申請した枠内で実施できたのか。
団体	作成した冊子の裏に掲載があるように、企業などからの賛助金を得ている。補助金は使用用途が限定されているため、自由に活動を拡大できる賛助金などにより活動の幅を拡げられている。
委員	毎年、金武小学校の３年生に授業を行っているのか。
団体	団体の立ち上げ当初から、小学校と連携して実施してきた。はじめは団体が主に動かしていたが、継続して実施していく中で、主体性をもって環境教育を行ってもらえるよう PDCA のサイクルを回し、小学校に働きかけてきた。今年度は特に熱心な先生が多かったため、生徒全員が新聞を制作するという成果につながったと考えている。川に入る活動については教育委員会ではなく各校の校長先生に決定権があるが、継続して連携してきた関係性でもって実現したと考えている。

５　ウエットランドフォーラム

発言者	発言内容
委員	課題の中で意識の変化につなげることが難しいとの記載があるが、今後どのように取り組んでいこうと考えているのか。
団体	難しい課題だと考えているが、こどもたちは干潟の生きものを自分たちが助けていると直接的に感じられることで、意識づけが強くなるようだ。ごみ拾いなどでも「汚れているからごみを拾う」ではなく、「拾うことでそこに住む生きものを助けることにつながる」という意識づけが大事だと思っているが、こどもたちはどうしても生きものを見る方に意識がいってしまうので、難しいところがある。
委員	確かに難しいことだと思う。大人たちの活動している姿がこどもたちの憧れにつながっていけば意識づけにもつながると考える。

委員	マイクロプラスチックの問題や海洋ごみの問題にしても、学習でなく実際に現場を見るだけでも全く違うと思う。地道な活動が大事である。
団体	実際に見るという点では、堤防近くの干潟に降り、堤防の上、真ん中、下にそれぞれ生きものの住み分けが行われている姿を観察した。遠くで見るとわからないが、近くで見ると、たくさんの生きものの住処であることがわかるなど、こどもも大人も大きな驚きがあった。今後も継続していきたい。
委員	活動を行っていくうえで、グッズを作ることは効果が高いかと感じている。市の補助金以外にも補助金を使われているようだが、来年度以降の活動資金の見込みはどのようになっているか。
団体	活動当初は全くお金がないところからスタートしているので、資金がないなりに活動を継続していける。ただ、補助金が出ることで啓発グッズを制作できたり、広報できたりするので、うまく活用しながら活動していきたいと考えている。そもそも補助金は必ず出るものではないので、活動の計画を立てる段階で、補助金が出る時と出ない時とをシミュレーションしながら組み立てている。
委員	環境保全とこどもたちの体験の充実につながる活動だと感じている。作成された広報物のイラストやデザインは外注しているのか。
団体	イラストは自分で制作している。印刷だけを外にお願いしている。
委員	こどもたちが学び、大人たちに発信する点がすばらしい。環境アセスメントの委員を務めた経験の中で、建物の建造の際に生きものを移動させるということは知っていたが、海でも同じことが行われている点が興味深い。
団体	干潟の生き物を移動させることができたのは、普段から干潟を観察し、どこにどんな生きものが生息していて、どこに似た環境があるかを知っているからこそできたと考えている。